

# 天使と悪魔の契約結婚

## 登場人物紹介

### ユリエル

国教会の侍祭。  
物腰の柔らかい青年だが、  
出自には秘密が  
あるらしく……？

### クローディア

グリフィンの幼馴染。  
セラフィナには意地悪で、  
何を考えているのか  
分からない女性。

### エリナー

ある町で食堂を営む女將。  
セラフィナの恩人であり、  
母のような人。

### グリフィン

名門公爵家の当主。  
自身の野望のため、セラフィナに  
契約結婚を申し込む。  
黒い髪に瞳、冷酷な性格から  
「悪魔」という異名がある。

### エドワード

セラフィナの元婚約者。  
セラフィナがエリカを  
虐めていたと思い込み、  
彼女との婚約を  
破棄してしまう。

### クレア エリカ

セラフィナの継母と異母妹。  
二人とも自己中心的な  
性格をしており、  
セラフィナを虐めていた。

### セラフィナ

婚約破棄をされた子爵令嬢。  
家族に疎まれ、家を離れて  
暮らしていたところ、  
グリフィンから契約結婚を  
持ちかけられる。  
常にひたむきで  
真っ直ぐな性格。

王都にあるスペンサー伯爵家のタウンハウスは評判がいい。羽振りのよさを物語るかのように、大広間の床には白と黒の大理石が格子模様くわし模様に敷きつめられ、壁は白地に金の象嵌ぞうがんが施ほどこされていた。片隅にはお抱えの楽団が控え、軽やかな三拍子の音楽を演奏している。招待客はそれぞれがダンスに、会話にと社交を楽しんでいた。

そんな中で少々痩せ過ぎの少女がひとり、ぽつんと壁際に立っていた。本来ならば、若い女性が舞踏会での男性にもエスコートされずにいるなどありえない。婚約者や兄弟など、必ず誰かの手を取っているものなのだ。ところが、少女を気にする者はいない。彼女がレノックス子爵家の令嬢、セラフィナなのだと、説明されなければ誰も思わないだろう。

周囲の艶やかな髪と豊満な身体を持つ令嬢らと比較すると、くすんだ薄茶の直毛と痩せた身体は、十五歳の令嬢とは思えないほど貧相だった。身に纏った流行遅れで地味な青のドレスにすら負けてしまっている。ただ、その小さな顔におさまる大きな瞳だけは、寶石にも似た輝きを放っていた。

わずかに紫の混じる澄んだ青は、セラストブルーと呼ばれるまれな色合いだ。その美しさから、神が住む空の色だとも、至上の空色だとも言われている。セラフィナが亡くなった母親から受け継

## プロローグ

いだものだった。

その瞳は今ここにはいない婚約者のエドワードを探している。彼はセラフィナの幼馴染であり、スペンサー伯爵家の次男だ。

セラフィナはスペンサー伯爵夫人から、家族ぐるみで今日の舞踏会に招待されている。エドワードもこの件は承知しており、婚約者としてエスコートをすると約束してくれていた。

ところが、約束の時間を十分過ぎても、二十分過ぎても一向にエドワードは姿を現さない。だから、彼が見つけやすいようにと、入り口からもっともよく見える位置で壁の花となっていたのだ。しかし、さすがに一時間を過ぎたころには、約束を忘れられたのではないか、あるいはすっぽかされたのではないかと、様々な可能性が脳裏を過った。だが、すぐにエドワードはそんな人ではないと思ひ直す。彼は昔から心配になるほど、真直ぐで正義感の強い青年なのだ。

セラフィナが待ち続けている間にも、美しく装い紳士に手を取られた貴婦人が、次々と大広間へやってくる。艶やかなその姿を眺めながら、セラフィナは自分以外の家族が揃って舞踏会を欠席したことにほっとしていた。

父のヘンリーと継母継母のクレア、異母妹のエリカとは、関係がうまくいっていない。というよりは、三人が一方的にセラフィナを邪険にしているのだ。

クレアとエリカは、前妻の娘であるセラフィナの存在そのものが気に入らないらしい。口を開けばセラフィナの悪口ばかりで、そんな二人を好きになれるわけもなかった。

一方、ヘンリーとは血が繋がっているはずなのに、疎んじられている。理由はよくわからないけ

れど、近ごろは話すことさえ避けられており、セラフィナも近づきづらくなっていた。

彼らに今のセラフィナの状況を見られたら、なにを言われるか考えただけでも嫌になる。だからこそ、セラフィナひとり舞踏会に参加しているのは気が楽だったのだ。

セラフィナは久々に肩の力が抜けた気がして、大きく息を吸い込むと、あらためて扉に目を向けた。ちょうど二組の男女とひとりの背の高い男性が入場している。長身の男性はこちらに背を向けていたが、濃紺濃紺の上着とトラウザーズに包まれた後ろ姿からでも、均整の取れた体格なのだとすぐにわかった。

セラフィナは見るともなしにその男性を眺めていたのだが、男性も視線に気づいたのだろうか。彼が何気なく振り返った瞬間、目と目が合った。

男性の丁寧丁寧に整えられた髪は、混じり気のない漆黒漆黒だった。顔立ちはきりりとして端正で、鋭さを帯びた頬の線と引き締まった唇が、厳格な人柄を物語っている。髪と同じ漆黒漆黒に見える切れ長の目は闇を思わせ、謎めいた印象を与えていた。その男性の目がセラフィナをしつかりと捉える。「えっ……」

セラフィナが息を呑んだ瞬間、楽団の音楽も人々の騒めきも瞬く間に遠くなり、大勢いる招待客の姿が目に入らなくなつた。世界から自分たち以外のすべてが、消え去つたみたいと感じる。

漆黒漆黒と至上の空色の眼差しが空中で絡み合う。セラフィナは男性から目を逸らせなかった。彼も食い入るようにセラフィナを見つめている。

それは一瞬だったのか、あるいは永遠だったのか。気がついたときには、男性は迷いなくこちら

へ向かってくる。

セラフィナは得体の知れない恐れを感じ、思わず身じろぎをしたのだが、壁際にいた彼女に逃げ場などなかった。男性がセラフィナの前に立ち、手を差し伸べる。

「お嬢さん、失礼。よろしければ私と一曲踊っていただけませんか？　壁の花にしておくには、あなたは魅力的過ぎる」

セラフィナはいまだに男性から目が離せなかったが、その誉め言葉付きの申し出を丁寧な謝罪とともに断った。

「せっかくのお誘いを申し訳ございません。そろそろ婚約者がやってくる予定なのです。手違いで少々遅れているようなので、こちらで待っているつもりですわ」

婚約者を待つているのに、他の男性の誘いを受けるなど、淑女としてはあるまじき真似である。それに、不貞はセラフィナがなにより嫌うものだったのだ。

「婚約者がいるのですか……。そうか、わかった……」

男性は手を引くと身を翻した。

「私ならレディを待たせるなどありえないがね」

セラフィナは男性を見送りつつ、先ほどの瞬間はなんだったのかと思う。

ふと大広間の中央に目を向けると、何組かの男女が踊っている。その軽やかなステップを見ているうちに、今し方の不思議な感覚が薄れていくのを感じた。やがて楽団が演奏を終え次の曲の準備に取りかかると、カップルらもいっせいに動きを止め、笑い合いながら場を移し始める。

すると、舞踏会の華やかな雰囲気に対応しにくい、怒鳴り声が響き渡った。

「セラフィナ！　セラフィナはいないか!!」

何事かと招待客らが足を止める。名を呼ばれたセラフィナは声が出た方に目を向けた。

扉を塞いで立っていたのは、金髪と水色の瞳を持つ青年である。瞳に合わせた水色のシャツと漆黒の上着、同じく漆黒のトラウザースがよく似合っていた。優男風の佇まいは、さぞかし令嬢らに人気だろうと思わせる。ところが、その印象を覆すかのように、優しげな顔は怒りで真っ赤になっていた。

「エドワード……?」

セラフィナは驚きをもって青年の名を——婚約者の名を呟いた。

彼の隣には、若草色のドレスを身に纏った栗色の髪の少女が立っていた。一見可愛らしい顔立ちだが、気の強さが目つきに表れている。

「あのご令嬢はレノックス子爵家の次女、エリカ嬢ではないか」

異様な事態に招待客らが騒めき始めた。しかし、好奇に満ちた彼らの目など気にすることもなく、エドワードはエリカをエスコートし大広間を突っ切っていく。そして壁際の間近にきたところで、立ち竦むセラフィナに鋭い眼差しを向けた。

なぜエドワードがエリカとともにいるのか。なぜ自分にこんな目を向けるのか。セラフィナはなにもわからず混乱していた。

そんなセラフィナをよそに、エドワードが重々しい口調で告げる。

「このときをもって君との婚約を破棄し、新たにエリカを婚約者とすることを宣言する。君は卑しい身分の後妻の娘だからとエリカを虐げ続けたそうだな。そのような卑怯な真似は許しがたい」  
「虐げた……？」

エドワードの非難にはまったく心当たりがなかった。

「エリカから相談を受けていたんだ。いくら腹違いの妹が気に入らないとはいえ、身分を理由に孤立させるなんてひどいじゃないか。おまけにエリカの大切なものを取り上げてまで……。僕はエリカを守らなければならない」

セラフィナはさすがに絶句し、エドワードとエリカを交互に見つめた。エリカの緑の瞳には勝ち誇った光が浮かんでいる。

ようやくセラフィナは、エリカにしてやられたのだと気づいた。彼女が近ごろエドワードに会っていたのは知っていたが、それはこのためだったのかと唇を噛む。

エドワードは生真面目で正義感が強いぶん、一度こうだと思えばと頑固に意見を翻さない。この場で反論をすればますますムキになり、公衆の面前で非難の応酬となるだけだろう。結果、恥を掻くのは自分たちだけではない。この舞踏会の主催者であるスペンサー伯爵夫人——エドワードの母の面目もまた潰してしまう。

幸か不幸かエドワードの母は現在、玄関広間で招待客らの歓迎をしている。彼女の仲裁を期待できない以上、自分がこの場をおさめなければならぬ。セラフィナは心を落ち着かせるために息を吸い、エドワードに宥めるように語りかける。

「エドワード、このお話は別の場所で行きましょう。招待客の皆様もいますから——」

「誤魔化すつもりだな？ そうはいかないぞ！」

彼の怒鳴り声に大広間がざわりと揺れる。

「エドワード、お願い。落ち着いて」

「僕は落ち着いている！」

ついに我を忘れたエドワードに、周囲は貴族にあるまじき醜さを感じたのだろう。あちらこちらから囁きが聞こえた。

「あの方はスペンサー家のエドワード様よね？」

「こんなところで言い争い？ みっともないわね」

「夫人はどんな嫉妬をなさってきたのかしら」

これはまずいとセラフィナは内心頭を抱える。エドワードに気づいてくれと目を向けたものの、彼はセラフィナを睨みつけたままだ。こうなってしまうとエドワードは止まらない。セラフィナが認めなければ、ますます激高してしまうだけだ。

ここにきてセラフィナは覚悟を決めた。幼馴染としての、そして婚約者としての長年の絆が、こども呆気なく崩れ落ちるものかと、虚しい思いに駆られながら。

「エドワード」

セレストブルーの瞳で、真っ直ぐにエドワードを見つめると、彼は一瞬はっと息を呑んだ。セラフィナはすっと背筋を伸ばし、エドワードを見据えたまま静かに告げる。

「私との婚約を破棄されたいとの旨、確かにお聞きしました。面倒でしょうが我が家に使者を送ってくださいませ。そのあと両家での話し合いとなるでしょう」

エドワードとエリカが驚くほどに冷静な口調だった。

「エリカへの嫌がらせを認めるんだな!？」

セラフィナの三日月型の眉がピクリと上がる。

「いいえ。神に誓ってそのような恥知らずな行いをした記憶はございません」

「証拠はあるのか!？」

「エドワード、証拠は被疑者ではなく告発人が提出するべきものです。私にはなく、エリカにセラフィナ・グレイシー・レノックスが確かにやったのだという証拠をお求めください」

エドワードはぐっと押し黙りセラフィナを睨みつけた。

「この話はこれで終わりですね」

セラフィナはエドワードから目を逸らすと、ドレスの裾を摘み退出の一礼をした。

「……昔は楽しかったわ。どうぞ妹とお幸せに。皆様、大変お騒がせいたしました。今一度、今宵の舞踏会をお楽しみくださいませ」

セラフィナはそれだけを言い残すと、静まり返った一同を残し大広間を出ていった。その背を先ほどの男性が見つめていることなど知らずに――

## 第一章 漆黒の公爵

セラフィナがエドワードと知り合ったのは、六年前のことである。当時エドワードは十二歳、セラフィナは九歳だった。スペンサー伯爵家とレノックス子爵家は、爵位の差こそあったが血縁関係があり、互いの家に招き合っていたのだ。同じ年ごろの少年や少女が少ない中で、二人の距離が縮まるのは自然な成り行きだった。

やがてスペンサー伯爵家から縁談の申し込みがあり、正式に婚約者となったのが五年前。エドワードとは燃える恋こそないものの、家族も同然の穏やかな関係を育んできたつもりだった。しかし、それも昨日で終わりを告げてしまう。思えば、セラフィナが十三歳の秋に母のアンジェラを亡くしてから、彼女の手からはすべてが零れ落ちていった。

「セラフィナ、とんでもないことをしてくれたな。今日スペンサー家から婚約解消の使者がきたぞ」

ヘンリーの冷たい声を聞きながら、セラフィナはゆっくりと顔を上げた。ヘンリーはマホガニーの椅子に腰かけ、厳めしい表情で机の上で手を組んでいる。セラフィナは罪人のようにその前に立たされていた。

こうしてヘンリーと相對するのは久しぶりだとセラフィナは思う。アンジェラが亡くなってから

の二年はセラフィナと呼ばれることはおろか、顔を合わせて話することすらなかった。

その間にヘンリーの表情はよりかたくなつたと感じる。恰幅のよい身体を椅子に押し込め、セラフィナを冷たい目で見つめるさまは、法廷で判決を言い渡す裁判官を彷彿とさせた。身に纏った仕立てのよい紳士服が、法服と同じ漆黒であるから猶更である。きつちり整えられた灰色の髪と灰色の瞳、眉間に寄る皺が、セラフィナへの冷酷さを増して見せていた。

それでもセラフィナはヘンリーから目を逸らさない。娘のセレストブルの瞳にヘンリーはかすかに眉を蹙めた。ヘンリーの隣に立ち控えるクレアもまったく同じ表情になる。

厳格な見た目のヘンリーに対して、クレアはきつめの派手な美人である。顔立ちはエリカによく似ており、緑の瞳には抜け目のなさがあつた。着飾るものも装飾の凝つたものを好み、ここにきてから何着ドレスを作つたのか不明なほどの浪費家である。なぜこんな正反對な二人が夫婦となつたのか——セラフィナにとっては永遠の謎だつた。

やがてヘンリーが重苦しい口調で告げる。

「婚約を破棄されるなどあつてはならないことだ。もはやお前が娘だという事実は恥でしかない」  
「……」

セラフィナは言い訳をしようとはしなかつた。最近のヘンリーの自分に対する扱いで、どのような主張も聞き入れられないとわかつていたからだ。現在はセラフィナに対して冷酷なヘンリーも二年前までは愛情深いとは言えないものの、父親としての役割は果たしていた。だが、アンジェラが死んだ今、義理を立てる気はないのだろう。

アンジェラは、とある富裕な伯爵家の出身だつた。対するレノックス家は歴史の古い名家だつたが、ヘンリーの祖父が事業に失敗し、借金塗れとなつていたのである。一時期は社交界でろくに相手にされなかつたのだそうだ。

だが、ヘンリーはアンジェラと結婚し、その多額の持参金で財政を立て直した。さらにはヘンリーの興した事業が軌道に乗り、貴族としての面目と生活を取り戻すことができたのである。ところが同時期にアンジェラが事故死した。セラフィナにはアンジェラを生贄に、レノックス家が再興したかのように見えた。

セラフィナとつての不幸はそれだけでは終わらなかつた。ヘンリーはアンジェラの死後三ヶ月も経たぬ間に、後妻のクレアと異母妹のエリカをレノックス家に迎えたのだ。ひとつ下の妹がいると知つた日の衝撃は忘れられない。ヘンリーの長年の裏切りを示すものだつたからだ。

継母となつたクレアは準男爵家の出身である。準男爵家は爵位こそあるものの、貴族の中では最下位であり平民扱いをされていた。後妻でなければ、歴とした貴族であるヘンリーが妻に迎えることは叶わなかつただろう。

クレアはセラフィナの由緒正しい血筋が気に食わなかつたのか、アンジェラを慕っていた執事や使用人、世話を追いつけず、セラフィナを家庭内で孤立させた。家族での食事にセラフィナが同席することも許さなかつた。つまりエドワードが舞踏会で主張した虐めとは、そっくりそのままセラフィナが受けていた仕打ちだつたのだ。

ヘンリーもそんな妻を咎めることすらしなかつた。ヘンリーはアンジェラを愛してなどいなかっ



たのだろうし、愛してもいない女性との娘を守る気もないのだろう。

「出ていけ。当分は自室に謹慎だ。外に出ることは許さん」

セラフィナは「かしこまりました」と答え一礼をすると、表情ひとつ変えず部屋から出ていった。命令どおりに自室へ戻るつもりだったのだが、途中、扉から漏れ出る声に思わず立ち止まる。

「気味悪いっつらないわ。本当にあの女の目にそっくり。見るだけでぞっとするわ」

「あとしばらくの辛抱だ。ようやく修道院に入れる理由ができたからな」

セラフィナはやはりそうかと唇を噛み締める。修道院に一生閉じ込め厄介払いするつもりなのだ。ところがそんなヘンリーにクレアが異議を唱えた。

「待つて、ヘンリー。あの娘はまだ使えるわ。トムソン男爵を覚えているでしょう？」

トムソン男爵ならセラフィナも知っている。好色と噂の肥え太った老人であり、セラフィナと同じ年の孫がいたはずだ。

「あのご老体はアンジェラにお熱だったわ。忘れ形見であるセラフィナを後妻に欲しいと言っていたじゃないの。ほとぼりが冷めたらトムソン家に縁談の打診をしましょう。最近羽振りがいいそうだから、今のうちに恩を売っておくのよ」

とんでもない提案を耳にし、セラフィナは呆然と呟く。

「……冗談ではないわ」

壁に背をつけ自分で自分を抱き締める。こんな仕打ちを受けるなんて、本当に冗談ではなかった。

自室での謹慎も一週間が過ぎるころ、セラフィナはヘンリーにふたたび呼び出され、三日後に修道院に入るよう命じられた。そこで舞踏会での醜聞がおさまるのを待ち、トムソン男爵へ興入れさせるつもりなのだろう。

準備をしておくとヘンリーに告げられたものの、セラフィナに私物はほとんどなかった。母の形見の宝石類はいくつかを残してクレアに奪われているし、わずかに持っているドレスにも未練はない。

セラフィナは退出すると、邸宅の片隅にある自室へ戻った。扉の前まで来たところでエリカが壁に背をつけ、意地悪い表情で腕を組んで立っているのを見つける。気にせず部屋に入ろうとするセラフィナの背に、エリカが勝ち誇った声をかけた。

「昨日、エドワードが私の婚約者になったわ。私が十八になったら結婚式を挙げるのよ」

セラフィナは扉にかけた手を止める。その発言はレノックス家の跡取りが、セラフィナからエリカに挿げ替えられたことを意味していた。

レノックス家のように男児のいない貴族は、家の存続のために血縁から婿を取る必要がある。本来であれば長女であるセラフィナがエドワードと結婚し、当主の地位を夫に託す形で断絶を免れるはずだった。

だが、格上であるスペンサー家のエドワードが、婚約破棄を宣言した以上、セラフィナがその役割をするわけにはいかない。すべてはエリカの筋書きどおりということなのだろう。

「欲しいものは自分の力で手に入れるものよ。母さんや私のようにね」

エリカは嬉しくてたまらないといったふうにセラフィナの顔を覗き込んだ。

「ああ、可哀なセラフィナ、あなたには味方が誰もいないのね。お父様にもエドワードにも見捨てられて。みんな、あなたではなく私を選んでのよ」

みんな、自分ではなくエリカを選ぶ——セラフィナはその言葉に、ヘンリーとの十五年を走馬燈のように思い浮かべた。

思えばヘンリーはセラフィナの幼少期から、決して目を合わせはしなかった。セラフィナがヘンリーをじっと見つめると、さりげなく顔を逸らしてしまう。他の父親など知らないセラフィナは、男親とはそういうものだろうと捉えていた。

しかしヘンリーはエリカには微笑みかけ、優しく頭を撫でていたのだ。初めてその光景を目にしたとき、心臓が一瞬ぎゅつと縮み、息ができなくなったのを覚えている。今でもそのときのことを思い出すと苦しい。

「……」

「なにか言うことはないの？」

エリカはセラフィナが悔しがり、泣き叫び、取り乱すさまを期待していたのだろう。ところがセラフィナは眉ひとつ動かさずに彼女を見つめた。こんなところで決して泣いてはならない、エリカにも自分にも負けてはならないと背筋を伸ばした。それが精いっぱい抵抗だったのだ。

エリカは鏡のように澄んだセレストブルーの瞳に、くつきりと映し出されたおのれの姿にあとずさる。

「なによ。なにしているのよ！ 気持ち悪い!!」

セラフィナは一步エリカに近づいた。

「エリカ、エドワードは人を疑うことを知らない人よ。そのエドワードが私ではなく、あなたを信じて決めたのだから——」

言葉を切り、エリカを見据える。

「これからはエドワードにだけは誠実でいて。……私の言いたいことはそれだけよ」

あんな結果に終わってしまったが、エドワードは今でもセラフィナにとって、放っておけない幼馴染だった。いまだに家族の愛情にも似たものがある。

思えばセラフィナが年下であるにもかかわらず、エドワードとの関係は姉と弟も同然だった。何事かある度にセラフィナが彼の尻拭いをしてきたのだ。だからこそ、我儘なエリカと末っ子気質のエドワードがうまくいくのか不安だった。

セラフィナの言葉にエリカの頬が赤く染まる。馬鹿にされたと感じたのだろう、唇をわずかに噛み締め身を翻す。その足音が遠ざかるのを確認し、セラフィナは静かに扉を開けた。自室の中央に立ち、二年間暮らした部屋をゆっくりと見回す。

この一階の部屋は日当たりが悪く、長らく使われていなかった。ところがクレアとエリカがやってくるのと同時に、セラフィナは今日からここで暮らせと放り込まれたのだ。十三歳のセラフィナは急激な環境の変化と、突然現れた継母の態度に戸惑うしかなかった。母を亡くしたばかりのセラフィナには、すべてが受け入れづらい事態だった。

この窮状をエドワードに訴えようと思ったこともある。ところがエドワードからの誘いのすべてにエリカがついてくるようになったのだ。

『私も素敵なレディになりたいの。そのためにお姉さまを見習いたい』  
エリカが無邪気にねだると、エドワードもセラフィナの妹ならと許してしまい、セラフィナはなにも言えなくなってしまった。

セラフィナが手をこまねいている間に、クレアとエリカはセラフィナがエドワードに送った手紙、またはエドワードがセラフィナに送った手紙を、途中で握り潰していたのだろう。セラフィナはこの数ヶ月まったくこない返信にそんな疑問を抱き、エドワードに直接会わなければと思っていた。そしてやっと舞踏会で顔を合わせた途端、してもいない虐めを咎められたのだ。

セラフィナは瞼をかたく閉じ、顔を伏せた。唯一の母の形見である簡素な銀の十字架を握り締めながら、いまだに癒えない痛みを力づくで胸に封じ込める。最後にみずからに言い聞かせるかのようには呟いた。

「セラフィナ、自分の力で立ち上がって、背を伸ばして、前を見なさい。あなたにならできるわ。あなたは強い子なのだから」

この言葉は落ち込んだとき、自分を奮い立たせるため、母からもらった魔法の言葉だった。瞼を閉じたまま、幼かったあのころを思い出す。

それはセラフィナが初めてアンジェラと外出したときのことだった。

その日の空はどこまでも深く青く、緑の丘はどこまでも鮮やかで美しかった。丘の下の牧草地や草を食む羊の群れ、小さく目に映る領民らの玩具のような家々を見て、世界はこれほど広く限りがないのだと思った。

幼い子どもにとってはなにもかもが珍しかったのだろう。セラフィナは頂の近くで従者の馬から降ろされるなり、思わずその場から駆け出した。小さな手を大きく広げると、自分の瞳と同じ色の空を、丸ごと抱き締めた気分になる。

『お母様、見て、見て！』

アンジェラは子どもから見ても美しい人だった。煙のような睫毛と憂いを帯びた眼差し、高くて細いすっきりした鼻筋。常に微笑みを浮かべる唇には、うっすらと紅が塗られていた。華奢な身体をラベンダー色のドレスに包み、レースの傘を手にしているさまは、神話の花の精を思わせた。

セラフィナは大好きな母と同じ亜麻色の髪、セレストブルーの瞳であることを、心から誇りに感じていたものだ。

『空の色が私たちといっしょよ！ とつてもきれいなね!!』

アンジェラはセラフィナのそばに歩み寄り、眩しそうに空を見上げた。そして、どこか哀しげな微笑みを浮かべる。

『まあ、確かに同じね。本当に綺麗なこと』

セラフィナはその横顔に首を傾げる。

『お母様……?』

思えばこのころからアンジェラは、遠い目をするようになっていた。セラフィナは彼女の心がこの場がないのを感じ、ひどく心細く不安になる。早く呼び戻さなければ、なにか注意を引くものはないかとあたりを見回した。

やがて少し先にブルーベルの群生を見つめ、喜び勇んで摘みにいった。ブルーベルは紫がかった青の花だ。自分たちの瞳と同じ色の花を見て、きつと母も笑ってくれるだろうと心を弾ませ、釣り鐘がいくつもぶら下がったかのような、鈴蘭にも似た花で手を一杯にする。

『お母様、見て。ブルーベルが咲いていたの。お母様の髪にさしてあげるわ』  
娘の愛らしい気遣いに、アンジェラの瞳に柔らかな光が浮かんだ。

『まあ、ありが——』

ところが、気が急いでいたためか、アンジェラまであと少しというところで、セラフィナは小石に足を取られ転んでしまった。腹這いに倒れ、額をしたたかに打ちつける。

『大変だわ。お嬢様！』

すぐさま乳母が駆け寄ろうとしたが、アンジェラは手を出しそれを止めた。

『お待ちなさい』

娘に歩み寄りそつと顔を覗き込む。

『セラフィナ、自分の力で立ち上がって、背を伸ばして、前を見なさい』

セラフィナは転んだ衝撃で泣きそうになっていたが、アンジェラの言葉に驚き、涙が引いた。これまで乳母や使用人らが必ず抱き起こしてくれていたし、アンジェラも優しく撫でて慰めてくれた。

ていたからだ。自分を見上げるセラフィナに、アンジェラはゆっくりと繰り返す。

『あなたにならでできるわ。あなたは強い子なのだから』

セラフィナは何度か目を瞬いたが、やがて言われるとおりに痛みを堪えて身体を動かした。土に汚れたドレスを見て、また涙が出そうになる。それでもセラフィナは歯を食いしばった。

立ち上がった次の瞬間、ふたたびセレストブルーの空が見えた。痛みはまだおさまらないけれど、惨めな気持ちが続くとその青に溶けていく気がする。人は悲しいから俯くのだが、俯くことでより悲しくなるのだと、セラフィナはそのとき初めて知った。意志の力で背を伸ばして前を見ることは、そうした気持ちを振り払い、おのれを奮い立たせる力があるのだとも。

アンジェラの手がふわりと肩に乗せられた。

『まあすごい、頑張ったわね。セラフィナは世界一素晴らしい子よ』

母にこれ以上ないほど褒められ、セラフィナは生まれて初めて誇らしさを覚えた。

『あなたは大丈夫ね』

アンジェラは、セラフィナについた土を丁寧に拭いながら、ほつと溜め息を吐く。

『あなたは私と違って、きつと何度でも立ち直れる。だから、きつと大丈夫ね……』

——それからは立ち上がれる限りは大丈夫だと、自分に言い聞かせ続けてきたのだ。アンジェラが亡くなったときも、婚約を破棄されたときも、たった一つの心の支えだった。

「……そう。私は大丈夫だわ。だから、背を伸ばして、前を見るの」

セラフィナは言い終えるのと同時に、背を伸ばして真っ直ぐに前を見据えた。母を亡くしエドワードとも別れた今、レノックス家に未練はなかった。愛情を与えられずとも、婚約者を奪われようとも、自分の人生まで汚されるつもりはない。セラフィナは家を出ていくつもりだった。

このために謹慎中は従順に振る舞い、ひたすらどう抜け出すのかを考え、計画を練りに練っていたのだ。ヘンリーとクレアに怪しまれぬように、少しずつ準備を進めていたため、ギリギリまでかかってしまったけれど。

とはいえ、もつとよく注意をしていれば、セラフィナが不自然な行動を取っているのは、なんとなくわかっただろう。ところが、彼らが気づいた様子はまったくなかった。セラフィナは胸を撫で下ろすのと同時に、自分がいかに関心を持たれていないかを実感し、寂しく悲しい思いにも駆られていた。

翌朝、家出の準備のため、セラフィナはベッドの下から服を取り出した。絹のハンカチや革手袋などの比較的高価な小物と引き換えに、メイドらから密かに手に入れていた仕事着と平民の私服である。私服はブラウス、スカート、帽子、靴、鞆とどれも使い古したものが、変装するにはちょうどいい。セラフィナは仕事着に着替え長い髪を纏めると、特徴的な瞳を前髪で隠した。次いでアーチ形の大窓に手をかけ、なるべく音を立てずに開く。セラフィナは地面に下り立ちすぐさま裏手へ回った。

レノックス邸は頑丈な鉄柵で囲まれており、二人の屈強な門番が屋敷を守っている。正面からではとても突破できないだろう。そこでセラフィナは、屋敷の裏手にある使用人専用の出入り口を狙うことにした。無論そこにも門番はいるのだが、ひとりだけなのだ。しかも、毎朝五時にはこの出入り口から、食材の買い出し担当のメイドが出ていく。セラフィナはそんなメイドのひとりに扮し裏門を訪ねた。

「おはよう。門を開けてくれる？ 市場に行くの」

「ああ、はいはい。ちょっと早くないか？」

かけられた疑問の言葉に、セラフィナは平静を装い答える。

「エリカ様がもうお目覚めになって、新鮮な卵のオムレツをすぐに食べたいとおっしゃったのよ。急がなきゃ叱られてしまうわ」

「あーあ、またか。あのお嬢様も相変わらずだなあ。ほいよ、いつてきな」

言葉とともに出入り口が音を立てて開かれた。セラフィナはあっさりと通され驚いたが、門番はセラフィナを疑った様子はない。

こうして、まんまと生家から脱出することに成功したのだった。

とりあえずは、乗り合い馬車の停留所のある町を目指す。セラフィナは歩きながら行き先について考えていた。家出を計画した際に真っ先に浮かんだのが、アンジェラの実家に当たるカーライル家だ。

カーライル家では奇しくもアンジェラの死の一ヶ月前に、セラフィナの祖父に当たる当主が病で亡くなっている。現在は叔父のブライアンが跡を継いでいるはずだった。

もつともブライアンがセラフィナを受け入れてくれるという自信はなかった。アンジェラから弟と仲が悪かったとは聞いていないが、彼はアンジェラの葬儀にこなかったからだ。今思えば当時は引き継ぎなどが忙しかったせいなのかもしれない。けれど、どうしても心にわだかまりは残ってしまった。

おまけにセラフィナは幼いころに数度しかブライアンに会っておらず、もはやその記憶は薄れ、顔すら覚えていない。ブライアンも同じであれば縁の薄いセラフィナを、しかも婚約を破棄され醜聞を振りまいた彼女を、積極的に保護するとは思えなかった。

それでも他に選択肢がなかった。まだ起きてもない出来事を想像し、負の感情に振り回されても仕方がない。

「いくしかないんだわ……」

セラフィナはふと顔を上げ、足を止めた。しばらく先の町にある教会の尖塔が見えたからだ。目指す町はさらに先があり、長い道のりを思つてふうつと溜め息を吐く。慣れない靴と歩きのせいで踵はすり剥け、血が滲んでいた。

「……っ」

痛みで顔を歪めるも、足を止めることはなかった。

それから一週間が過ぎたころ——セラフィナは七つ北にある町にいた。わずかな所持金で乗り合い馬車を乗り継ぎ、安い宿屋に泊まり、とにかくいけるところまでいったのだ。

冷遇されていたとはいえやはり貴族の令嬢であり、世間知らずであったセラフィナにとって、楽

な旅路ではなかった。いかにも怪しい男性に声をかけられ、どこかへ連れ込まれそうになったのは一度や二度ではない。今も無事なのは奇跡と言つていいだろう。

ところがこの町に着いて乗合馬車から降り立ったところで、所持金が残りがくわずかだと気づき、夕闇の大通りで途方に暮れる。宿屋を借りられないので、セラフィナは仕方なく路地裏に一枚きりの上着を敷き、そこに腰を下ろして壁に寄りかかった。寒さをしのぐと自分で自分を抱き締め、溜め息を吐く。

ようやくここまでできたが、カーライル領まではまだ遠い。王都を挟んでさらに五〇マイルは先があり、手持ちの銀貨一枚程度では間に合わないだろう。押し寄せる不安にかたく瞼を閉じる。

そのとき、突然誰かに呼ばれ、セラフィナは目を開けた。

「あなた、なにやっているの？」

人のよさそうな大柄の女性だった。褐色の髪は後ろでまとめ、紺の簡素なドレスにエプロンをつけている。年齢は三十代後半だろうか。女性は腰を屈めセラフィナの顔を覗き込む。

「この町は治安が悪いわけじゃないけど、若い娘が外で寝るとなると、さすがに貞操の保証はできないよ」

セラフィナは呆気に取られて女性を見上げた。

「あ、あの……」

「あら、あなた、いい目をしているねえ。なにかわけあり？」

女性はセラフィナの肩に手を置き、にっと笑う。

「なんだつたらうちにくる？ 少し手伝ってくれば食事と宿くらいあげられるよ。私はその曲がり角にある食堂の女将のエリナーさ」

食事と宿と言われてしまうと、セラフィナの心は否が応でも傾く。エリナーの眼差しの優しさと温かさが、アンジェラによく似ていたのも決め手になった。おずおずと立ち上がったセラフィナは、ありがたさに涙が滲みそうになり、慌てて目元を擦った。

「……では、お世話になってよろしいですか」

エリナーはまたにと笑いセラフィナの手首を掴んだ。

「さあ、こっちだよ！」

彼女の運営する石造りの食堂は古く狭かった。店内には煤けたカウンターとテーブル六つが据えつけられていて、どの席も労働者の男性たちでこった返している。

セラフィナは一瞬中に入るのに躊躇したが、有無を言わずエリナーに腕を引っ張られてしまった。カウンター内の厨房に押し込まれるなり、湯気の立つスープとコップを渡される。

「はい、お願い！」

「え、え？」

「そっちのエールは右の奥の髭の爺さんね。そっちのスープはカウンター左端の茶髪の男性」

「どうやら料理を運べと言っているらしい。」

「おーい、女将、料理はまだか」

呆気に取られるセラフィナに、エリナーはほらほらと手を振った。

「早くいってあげて。あの人たちお腹ペコペコなんだから」

セラフィナは戸惑いながらも、食器をそれぞれ手に持った。ところが、スープを零さず運ぶのが意外に難しい。コップいっぱいに入っているエールも、少々テーブルにかけてしまった。

「もっ、申し訳ございません！」

「いいって、いいって」

真つ青になって謝るセラフィナに、男たちがげらげらと笑う。

「姉ちゃん、今日が初めてか？ 初々しいなあ」

「まー、すぐ慣れるって。元氣出しな!!」

「申し訳ございません、申し訳ございません」

セラフィナはそう繰り返しつつ、カウンターへ引っ込んだ。中ではエリナーも笑いながら待ち構えている。

「はい、じゃあ、次はこれね」

今度は野菜の入った籠とナイフを渡された。

「皮を剥いて適当に切ってね。で、火にかけているスープが煮立ったら放り込んで、柔らかくなったところに塩を振って。適量よりは多めにして、ちよつと塩辛いかな？ って思う程度にね。みんな働いて汗をかいているから」

皮を剥く。適当に切る。放り込む。塩を振る。味見をする——すべてがセラフィナにとっては未知の言葉だった。エリナーがさつさと向こうにいうとするのを慌てて引き留め、恥を忍んで尋

ねる。

「あ、あの、あの、適当に切るって大きさはどれくらいなんですか？ スープが煮立つってどんな状態なんですか？ 塩の適量ってどれくらいなんですか？」

「えっ？ ああ、そっか。貸してごらん」

エリナーは頭を掻くとナイフを受け取った。籠からイモらしき物体を手に取ると、あつという間に丸裸にする。そして調理台にあるまな板に乗せ、小気味よい音を立てて一口大に切り分けた。

「すごい……」

感動するセラフィナに、エリナーは「慣れよ」と微笑んだ。

「スープは時間がかかってもいいから、まずは皮剥きをゆっくりやってごらん。ちよつとくらい皮が残っていても気にしないよ」

「で、でも」

「なあに、死ななけりやいいのよ。美味しければなんとかなるものさ」

エリナーに背中を叩かれ、セラフィナも笑ってしまう。

「や……やってみます！」

そして、鬨志も露わに、早速イモへと向かった。ナイフは長年使われているのか、手によくなじみ握りやすかった。それでも下ごしらえは簡単ではなく、思った以上の時間がかかる。手も二度ほど切ってしまった。

セラフィナは痛みを堪えつつ、たった一皿のスープを作るのに、これほど手間がかかっていたの

だと驚く。レノックス家にいたころは、食べるばかりで知らなかった。

ふと顔を上げてエリナーの姿を探すと、彼女は焼いた肉を手早く二皿に盛りつけ、あらかじめ作っておいたソースをかけていた。つけ合わせの野菜を添えて、両手に持ってテーブル席に運びに出る。

その一連の動きを、セラフィナが一つのイモを剥く間に、なんと二度もこなしていたのである。

他にも時間が少しでも空けば、鼻歌を歌いながら皿を洗っていた。歌劇の主役のような軽快な足取りと手捌きに、セラフィナはつい見惚れてしまう。

はつと我に返るとふたたび作業に集中する。とにかく今は頼まれた下ごしらえを、できる限り早くに終わらせなければならぬ。

夢中になって働いていると、時間は瞬く間に過ぎて、食堂は深夜も間近にようやく閉店した。セラフィナは疲れ果てた身体を、やっとの思いでカウンターの椅子に預ける。初の下ごしらえと給仕に四苦八苦したものの、致命的な失敗はせずに済んだのが幸いだっただ。

「お疲れさま」

エリナーに声をかけられ、一杯のスープとパンとともに、少々黒ずんだ銀貨と銅貨が置かれる。

セラフィナは目を瞬かせエリナーを見上げた。彼女は笑みを浮かべてセラフィナの隣に腰をかける。

「あなた、働くの初めてだったんだらう？ 今日の給料だよ。頑張ってくれたからね」

「こんなにたくさん……」

レノックス家で令嬢として暮らしていたセラフィナにとって、生まれて初めて自分で稼いだお金



である。信じられない思いでおそろる銀貨に触れると、なぜか胸がいつぱいになるのを感じた。「あの……ありがとうございます。このお店は女将さんおひとりだけなんですか？」

「そう、コツコツ働いてお金を貯めて、二年前やっと開店したの。ただ、最近忙しくなってきたから、人手が欲しいと思っただけだ」ところ」

エリナーはなんでもないことみたいに答えたが、セラフィナは雷に打たれたような衝撃を受けた。これまでセラフィナがいた貴族の社会では、女性が働くなどもつてのほかだったからだ。貴族の女性が学ぶものといえば、読み書きや計算の他に社交、ダンス、刺繍である。いずれはよき妻、よき母となることだけを求められていた。

貴族の女性のみならず平民ですら、こうして女性が表に立つて働くことは珍しい。女性の仕事とは農村での手伝いか、よくて乳母やメイドくらいなのだ。

「お辛くは……なかったですか？」

貴族と男性が尊ばれるこの国——大アルビオン王国で、平民であるエリナーがどんな辛酸を舂めたのか、セラフィナには想像もつかなかった。彼女はカウンタに手を組み、あははと笑う。

「そりゃ嫌なことたーくさんあったさ。けど、今は幸せよ。自分の力で生きていけるからね」

——自分の力で生きていける。

家にも親にも親族にも頼らない。なんと素晴らしいことかと思ったが、エリナーのようになるためには並々ならぬ強さと覚悟が必要だろう。セラフィナは一枚の銀貨をぐつと握り締めた。

「私にも、できるでしょうか？」

立ち働く自分の姿を想像してみる。

「ああ、もちろん」

エリナーは間髪を容れずに答え、セラフィナの肩をふたたび叩いた。

「そう望みさえすればできるさ」

その手は水仕事に荒れ、節々も目立っていたが、目と同じように優しく温かかった。



セラフィナが食堂のエリナーに勧められ、住み込みで働き始めてから一年が過ぎた。その間にセラフィナは十六歳になり、なにもできない貴族の令嬢から、食堂の看板娘へ転身を遂げていた。

今日も昼食時の食堂は、腹ペコの男たちでいっぱいである。

「おおい、スープ追加頼んだ」

「俺はレバーのゼリーとパン。あ、スープもな」

「はいはい、お待ちください！ ちょっと順番後しますよー」

次々どくる注文を頭に叩き込み、セラフィナは厨房に引っ込んだ。まずは野菜のサンドイッチである。焼いたパンをまな板に置くと、レタスと玉ねぎのピクルス、薄く切ったチーズを載せた。仕上げに塩と乾燥ハーブを手早く振り、もう一枚のパンを重ねれば完成だ。



「はい、どうぞ」

セラフィナはカウンター席の男性に、笑顔とともにサンドイッチを手渡した。

「次はスープね」

奥ではほどよく煮込まれたスープが、いかにも美味しそうな香りを放っている。セラフィナは食器棚から三枚の皿を出すと、あつという間にスープを注いでいった。具を取り分けている最中に、客のひとりが声をかける。

「俺、イモ少なめにして」

「いけませんよ!」

セラフィナは腰に手を当て客を叱った。

「ちゃんと食べなきゃ大きくなれませんよ!」

「いやあ、俺、もう五十過ぎだけ? 大きくなる必要ねえって」

いい年をした男性の泣き言に、店内にどつと笑い声が上がった。セラフィナもいつもと変わらぬやり取りに、屈託のない笑みを浮かべる。厨房のエリナーはそんなセラフィナを、母親のような眼差しで見つめていた。

食堂の営業は午前十一時から午後三時、午後五時から夜九時までの二部に分かれている。客入りのいい日には時間を過ぎることもままあり、今日も昼時の終わりが四時にずれ込んでしまった。そのぶん夜の仕込みを急がなければならず、セラフィナは目の前に積み上げられたイモを、片端から手早く剥いていた。

「すっかりうまくなったね。もう十年もやっているみたいだ」

エリナーがカウンター越しに、しみじみとセラフィナを眺める。セラフィナは飾り気のない褒め言葉に頬を染めた。

「……ありがとうございます」

この一年で料理や給仕を一日も休まず叩き込まれた。初めは手に擦り傷や切り傷が絶えなかったが、努力の甲斐あつてか、今では手際よくこなせるようになっていく。

エリナーは目を細めテーパーを拭き始めた。

「フィーナがきてくれたおかげで大助かりだよ」

エリナーがセラフィナをフィーナと呼ぶのは、セラフィナが初めにそう名乗ったからだ。自分は貴族の令嬢なのだ、正体を打ち明ける勇気はなかった。アルビオンでは貴族と平民は、生活も、価値観もなにかもが違い、双方が互いを別人種だと認識している。本来であれば交わることなど一生ない貴族の出身だと知られば、さすがのエリナーも態度を変えてしまおうと恐れたのだ。それに、エリナーのことは信用しているものの、情報が漏れいするのでも避けたかった。いつレノックス家の手の者が現れ、連れ戻されるかわからないのだ。万が一そうなってしまえば、意に沿わぬ老人との結婚を強いられ、死んだように生きていくしかない。自由と自立を経験してしまつた以上、そんな生活に耐えられるはずがなく、できればこのまま食堂で働きたかった。

もちろん、レノックス家にいたことと比べれば暮らしては貧しい。一日中の労働で手は荒れ、足も棒みたいになる日ばかりだ。それでもここでは「ありがとうございます」と感謝されたり、「ああ、美味しい。

またくるよ！」と褒めてもらえたりする。ちゃんと自分を見てもらえるのだ。それがなによりも生きる喜びとなる。

「フィーナ」

エリナーに呼ばれたセラフィナは、はっと顔を上げた。

「悪いけど、大通りの肉屋で鳥肉を三羽分買ってきてくれる？ 今日のはたっぷり肉を入れてみんなに振る舞おう」

「はい、わかりました！」

セラフィナはバスケットを手に入り口を開けた。通りを歩きながら脇に並ぶ店や、道に咲く花空を流れる雲を楽しむ。頬を撫でる秋の風が気持ちよく、気分がいつにも増して明るくなった。

途中、布地屋の磨き抜かれた窓ガラスに自分の姿が映り、何気なく立ち止まる。艶のない薄い茶の髪と肉づきの悪い身体だ。セラフィナの姿は母を亡くした十三歳から、時を止めたようにほとんど変わっていないかった。

レノックス家にいたところは幼く、美しいとは言えないこの姿に劣等感があった。だが、今となつてはこれでよかったのだと思う。平民にまじつても違和感がないからだ。なにが幸いなのかかわからないと思いつつ、セラフィナはふたたび肉屋に向かつて歩き始めた。

ちょうど解体した家畜を運び込んだばかりなのか、肉屋には新鮮な鳥獣肉がたくさんあった。軒先には羽を筆られた鳥や羊の腸が吊るされ、カウンターにも様々な部位が並べられている。別通りにある食堂の主人も面白い物にきており、熱心に羊肉を品定めしていた。

セラフィナは吊るされた鳥から三羽を選び、バスケットいっぱい詰めてもらった。エプロンのポケットから銀貨を取り出し店主に手渡す。

「ありがとうございます。こちら代金です」

「おうよ、また頼むな」

店主は片手でコインを受け取り、もう片手を腰に当てつつ、カウンター越しにセラフィナを眺めた。

「……？ なにか？」

「ん、いや、なんでもねえよ。女将おかみによるしくな」

店主は早いききなど手を振った。セラフィナは戸惑いながらも元きた道に戻る。

その背を見送った別通りの食堂の主人が頭を掻いた。

「あー、さっきあんたが言っていたのってあの娘かあ。確かに言われりゃそんな感じの目の色だったなあ」

「向こうも今日あたり確かめにくるとか言っていたぜ。ま、違っていてもたいしたことじゃねえさ」

店主はカウンターの片隅に置かれたメモを手を取った。一昨日おととい、商人組合を通じてとある通達があつたのだ。

『探し人あり。身体的特徴は、身長がやや低い、痩せ型、セレストブルーの瞳の娘。セレストブルーとは深みのある紫がかった青。情報提供者には全員に報酬金ほうしゅうきん。本人の場合さらに金貨十枚を追

加。なお、探し人本人ではない場合も罰則はなし。連絡は各組合にまで』

「どうせ別人なんだろうが、金貨十枚は魅力的だよな」

肩を竦すくめ、メモを丸めて後ろにぽいと捨てる。

「はてさて、このセレストブルーの瞳の娘はなにをしかしたんだか」

大方、借金取りから逃げ出したのだろうと、店主は手の汚れを拭ぬぐいつつ仕事に戻ったのだった。

セラフィナは大通りを歩きながら、頭の中で夕方からの仕事と、そのあとのエリナーへの授業の計画を練っていた。

現在はエリナーに衣食住すべてを提供され、日々の賃金までしつかりともらっている。しかし、未熟な自分の労働がそれに見合っているとは思えない。もっと役に立てないかと頭を捻ひねっていたとき、エリナーが文字の読み書きや数字の計算が苦手であることを知った。そこでセラフィナはエリナーにこんな提案をしたのだ。

『女将おかみさん、私が先生になります。言葉や数字には自信があるんです』

習得するまで経理と事務も手伝うと言ったら、エリナーはセラフィナの申し出に目を瞬しんかせた。

『本当にいいのかい？ 時間を取ってしまうよ？』

『もちろん大丈夫ですよ。何時間だって構いません』

セラフィナが胸を叩いてそう答えると、エリナーは手を取って喜んでくれた。

『あなたは神様が遣わしてくださった天使だ』

エリナーいわく、平民の女性の学力は誰もみな同じようなものらしく、彼女たちにとって教育そのものが贅沢ぜいたくなのだそうだ。

セラフィナはその話を聞いてから女性に教育を施ほどこす重要性を実感し、もつとできることはないだろうかと考えることになった。まだうまくまとまらないのだが、私塾などが効率的かもしれないと思う。

だが、さしあたってはエリナーの授業だ。文法のどのあたりを教えようかと悩みながら歩く。食堂がある通りに差しかかったところで、セラフィナは異変を察知し足を止めた。

食堂の出入り口に三頭の馬がつけられているが、夕方の開店には少々早く、客がくるのは不自然なのだ。セラフィナはそろそろと出入り口から顔を覗かせた。

「女将おかみさん……？」

中ではエリナーと複数の男性が言い争っていた。

「だから、そんな娘は知らないって言っているだろう？ 確かに似たような目の色はしているけどね、うちのフィーナはもつと美人だよ!!」

「そんなはずはない。近隣の住人はこの似顔絵そっくりだと言っていたぞ。言葉遣いや発音がどことなく平民とは違うともな」

セラフィナは扉に手をかけたまま立ち尽した。身体が一気に凍こりつき動いてくれない。エリナーがセラフィナの気配にはっとなり、男たちの肩越しに目を向ける。その視線を追い、男たちが揃って振り返った。三人のうち二人が手の中の紙とセラフィナを交互に見比べ、頷き合ってからゆっく

りと彼女に近づく。

「セラフィナ様ですね？」

「……っ」

「お父上のご命令でお迎えにまいりました」

恐れていたことが現実になり、セラフィナは言葉を発することすらできなかった。

「フィーナ、逃げるんだよ!!」

食堂にエリナーの叫び声が響き渡る。セラフィナはその声に我に返り、弾かれたように通りへ飛び出した。心臓の鼓動こどうが全身にこだましている。全速力での疾走で喉と肺が擦すり切れそうになっているセラフィナの頭の中は、疑問でいっぱいだった。

なぜ今更探しにきたのか。顔を見たくもない娘ならば、なぜ放つて置いてくれないのか。なぜやっと思つけた居場所を、生き方を奪おうとするのか。

セラフィナはどこに逃げるべきなのかわからないまま、ひたすら足を動かすしかなかった。だが、角を曲がったところで、はっと我に返る。

食堂から反射的に逃げ出してしまったが、残されたエリナーはどうなってしまうのだろうか。エリナーはセラフィナの正体を知らなかったとはいえ、結果的にヘンリー・レノックス子爵に、すなわち貴族に逆らった形になる。なんの力もない平民の女性が、はたしてどう裁かれ、どう罰せられるのか。

セラフィナは、すぐに戻らなければと身を翻ひるがえした。生家に帰りたくない、貴族に戻りたくない

などと言つてはいられない。ところが数歩走った途端、風に流された髪に視界を塞がれる。

「きゃ……!!」

不意に勢いを削がれて均衡を崩し、前のめりで転びそうになる。セラフィナは目を閉じ、続けるはずの衝撃を待った。だがその身体を受け止めたのは、かたい地面ではなく、甘さをかすかに含んだ大人の香りと、広くたくましい男性の胸だったのだ。

「おっと」

どうやら通行人の男性にぶつかってしまったらしい。

「も、申し訳ありません。お、お詫びはあとでさせていただきます」

セラフィナは体勢を立て直すが早いのか、元きた道を引き返そうとする。しかし、がくと身体が仰け反り、力ずくで引き戻されてしまった。

「なっ……」

何事かと振り返り、思いがけない状況に驚いた。男性がセラフィナの手首を強く掴んでいたのだ。

「どこへいく？ まさかあの店に戻るとでも？」

そう聞いてくる彼に目を向けたとき、聖書にある神に逆らい墮天した大天使、かつてもっとも光り輝き美しかった者——魔王が舞い降りたのかと錯覚し、セラフィナは目を瞬いた。髪も瞳も混じり気のない漆黒に見える。端正な顔立ちに謎めいた眼差しと長身の身体は、その場に立つだけで貴婦人らの目を奪うだろう。

どこかで会ったことがある気もしたが、セラフィナには男性の容姿に魅せられている暇などな

かった。

「だ……誰っ!? 放して！ 放してください!!」

この男性もレノックス家の手の者だと思い込み、掴まれた手を振り解こうと全力で暴れる。振り回したセラフィナの右手が男性の頬をかすり、彼はかすかに顔をしかめた。

「……まったくとんだお転婆の早とちりだな。私は君の父上の手下ではないぞ」

髪や目と同じ艶のある声で吹き、ぐいとセラフィナを引き寄せる。

「あっ……」

次の瞬間には、男性はセラフィナの背と膝の裏に手を回し、軽々と身体を抱き上げていた。

「なっ……!!」

「ジョーンズ!!」

男性の声が通り一帯に響き渡ると、すぐに角から黒塗りの馬車が現れた。セラフィナはその側面に刻み込まれた家紋に首を傾げる。黒い盾の中で驚く上半身に獅子の下半身、黄金の翼をはたためせる獣が天を見上げていた——伝説の聖獣グリフィンだった。

セラフィナはこの家紋を知っている。だがどこの貴族だったかと記憶を辿る間に、扉が開かれ瘦せた中背の若い男性が現れた。恐らく彼がジョーンズなのだろう。濃い茶の髪と瞳をしていて、顔立ちは整っているにもかかわらず印象の残らない不思議な男性だ。

「グリフィン様、どうぞ」

ジョーンズが男性を中へ招き入れると、男性はセラフィナを抱えたまま馬車に乗り込む。

「すぐに出せ」

セラフィナは我に返り男性の胸の中で暴れたが、そのころには馬車はすでに走り出していた。男性は追っ手がいないことを確認し、ようやくセラフィナを隣に下ろして座らせる。セラフィナは間髪を容れずに男性に詰め寄り、シミ一つない純白のシャツの襟首に縋りついた。

「帰して、帰してください!!」

ところが男性は少しも怯まず、セラフィナの手にみずからの手を重ねた。

「君はあの連中に捕まりたいのか?」

「だって……!!」

「逃がしてくれたというのなら、相手の意思を無駄にすべきではない。それはすでに裏切りになるぞ、セラフィナ・グレイシー・レノックス子爵令嬢」

セラフィナは名前と身分を言い当てられて口ごもり、あらためて男性が誰なのか疑問に思った。

「あなたは……?」

男性は唇の端をかすかに上げて笑う。

「あの日ダンスを君に断られた哀れな男さ」

あの日、ダンス、と単語を並べ立てられても、セラフィナにはなんのことだかさっぱりわからなかった。もしかしたら以前会ったことがあるのかもしれないが、結局、男性の正体がわからず、ぽかんと見つめるばかり。

「……忘れられていたとは思わなかったな。私は忘れようと思っても、忘れられなかったのだが」

男性は足を組みセラフィナの顔を覗き込んだ。

「私個人を覚えていないのなら、まずは名乗ることにしようか。私はグリフィン・レイヴァース・ハワード。ブラッドフォード公とも呼ばれている」

驚愕に、セラフィナの腰が席から浮いた。なぜグリフィンの紋章を見た時点で思い出さなかったのかと、おのれを呪う。

グリフィン・レイヴァース・ハワード、またの名をブラッドフォード公。大都市ブラッドフォードを中心とした、広大な領地と莫大な財産を持ち、王家とは血の上でも縁が深い公爵家の筆頭だ。

「どうして、公爵ともあろう方が、私を、助けたのですか……?」

震えながら問うセラフィナに、男性は——公爵は、微笑みを浮かべて答えた。

「まずは場所を変えようか」

やはり魔王を思わせる、美しく不吉な微笑みだった。

セラフィナはそのあと逃げ出そうと隙を窺ったのだが、公爵本人やジョーンズ、護衛らしき黒服らの監視により、結局それは叶わなかった。なぜ公爵が自分を攫ったのか、その意図をいくら考えてもわからない。

尋ねてみたところで、公爵は微笑みを浮かべるばかりで、セラフィナになにも教えようとしなかった。レノックス家に送るつもりはないことだけは救いだっただけで、いずれにせよ公爵の意のままなのだ。

「……っ」

セラフィナは膝の上で拳を握り締めた。おのれはまるで川に落ちた一枚の木の葉だと悔しく思う。家族に、公爵に、社会に、時代に、それらが渾然一体となった流れに翻弄されるだけ。そんな弱々しい自分はもう嫌だった。川が逃れられない人の一生だというのなら、ただ流される木の葉ではなく、舟の漕ぎ手となり行き先を決めたかった。それだけの強さが欲しいと心から願う。

「セラフィナ様」

ジョーンズに名を呼ばれ、セラフィナははつと顔を上げた。

「このような場で申し訳ございません」

一時間をかけて連れてこられた場所は、二つ先にある大きな街だった。セラフィナもお使いで一度だけきたことがある。食堂のある町とは異なり、人口が多く栄えている街で、人や馬車の行き来が激しい。中央から木材や布地、穀物などの物資が運び込まれ、一大集積地となっているのである。ジョーンズが馬車の窓を開け、一軒の立派な宿屋を示した。

「あちらでお話を聞いていただきます」

かつては商人の屋敷だった建物を、高級な施設として改装した宿屋だった。馬車が止まり、扉がゆっくりと開けられる。公爵は唇の端に笑みを浮かべつつ、セラフィナに手を差し伸べた。そのまま彼にエスコートされ、二階にある東側の部屋へ案内される。

「ブラッドフォードには負けるが、ここもよい眺めだな」

公爵は窓辺に手をかけ街を見渡してから、セラフィナを振り返った。

「では、早速本題に入ろうか。セラフィナ、私と結婚しないか？ 君は私の花嫁となる条件に最適だ」

「……は？」

あまりに唐突で飾り気のないプロポーズに、セラフィナは数秒、意味が理解できなかった。

「……結婚、ですか？」

「ああ、そうだ」

呆然とする彼女に、公爵ははつきりと頷く。

「私は昨年父を亡くし爵位を継承したが、あくまで仮のものではない。ハワード家には代々の家訓があり、それに従わなければ当主とは認められないからだ」

セラフィナには話がどこへ向かうのかまったく見えなかった。公爵は彼女の戸惑いを置き去りにしたまま続ける。

「正式なブラッドフォード公となるには、教会から承認された正妻が必要だとされている。セラフィナ、君にその妻となってもraithたい」

「……なぜ、私なのですか？」

さすがにこの状況、この台詞で、大貴族に見初められたと喜ぶほどおめでたくはない。なにか目的があるのだと考えるのが自然だ。

「閣下がご存知かどうかはわかりかねますが、私は一年前にスペンサー伯爵家に婚約を破棄され、社交界に醜聞を残しております。そのような女が妻となり、公爵家の歴史に泥を塗るなど、この身



には恐れ多過ぎます」

遠回しの拒絶に公爵の眉がかすかに上がる。

「私の誘いを二度もはねつけたのは君が初めてだ」

公爵は窓の縁から手を離すと、部屋を横切りセラフィナの目の前に立った。見上げるほどの背丈と悪魔を思わせる美しさに圧倒され、セラフィナは思わずあとずさる。しかし、公爵は一步、また一步と、獲物を追いつめるかのように、セラフィナとの距離を縮めていく。セラフィナを壁際に追いやった公爵は、彼女の頭上に右の肘と拳を当て、顔を近づけた。睫毛が触れ合いそうな間合いから、セラフィナの顔を樂しげに見つめる。

「公爵家の歴史と君は言うが、ハワード家の興りは国王の愛人が産んだ私生児だ。王位は王妃より生まれた嫡男にのみ与えられ、不義の子はなに一つ得られないと知った女は、息子に高位の爵位と領地を与えようと宮廷を奔走した。そのために国王だけではなく、王族に、廷臣に……はたしてどれだけの男性に媚びと身を売ったのか。その息子がグリフィン・レイヴァース・ハワード——私と同じ名を持つ初代だ」

公爵は拳を壁に強く叩きつけた。壁を貫かんばかりの衝撃に、セラフィナの身体がびくりと震える。公爵は怯える彼女の顎を掴んだ。

「そうした情婦の子孫だからこそ、我が一族は却って正式な結婚と花嫁の血筋にこだわる。当主の正妻となる女は嫡出子であるのと同時に、父母ともに五代を遡り貴族でなければならない——それだけが条件だ」

公爵の力強さにセラフィナはおののいた。この人は怖い、逃げなければと思うのに、悪魔に魅入られたように身体が動かない。公爵はそんなセラフィナの頬を、優しさすら感じる手つきで包み込んだ。

「セラフィナ、君はレノックス子爵家とカーライル伯爵家の血を引いている。いずれも五代以上前から貴族だが、中央での権力がほとんどない。私にとっては実に好都合だ。もちろん君にもメリットがある」

「メリット……？」

「結婚から二年後に、私と君は離婚する」

彼は手を離すと踵を返し窓辺へと戻る。セラフィナはわけがわからず、広い背を見るばかりだった。

「結婚から二年後には離婚……？」

公爵はふたたび窓の外へ目を向ける。

「二年間の婚姻後も子どもができないようなら、当主の権限により離婚が認められているからだ。私は妻も子もいらない。跡継ぎなど従兄弟やその息がいくらでもいる。だが、体裁は必要だ」

セラフィナはそこでようやく公爵が自分に結婚を申し込んだ理由を悟った。ハワード家と釣り合う高位貴族の出身の正妻では、離婚となれば相手の実家が黙っていない。子どもができないとの噂が広まれば、そのあとの再婚も難しくなるからだ。

ところがレノックス家に政治的な影響力はない。それにセラフィナ本人もエドワードの一件で立

場を失っており、初婚でのまともな結婚は望めなくなっている。失うものはなにもないと考えられているのだ。公爵の低く、艶のある声<sup>うつくし</sup>がセラフィナに告げる。

「君には来年から二年、私の妻としての役割を果たしてもらうこととなる。もちろんその間の重責と労苦を上回る報酬を渡そう」

セラフィナは妻とも結婚とも結びつきにくい、報酬という単語に首を傾げた。

「報酬とは……？」

公爵は身体の向きをゆっくりと変え、唇の端だけでかすかに微笑むと、セラフィナの目を見つめる。

「私は君の大切な女将<sup>おかみ</sup>さんを救える」

「……!!」

「それに加えて君が望むものをなんでもやろう」

セラフィナは目を床に落として彼の言葉を繰り返した。

「私が望むもの……」

——そんなものは自問自答するまでもなくわかっていた。ゆっくりと顔を上げると、一言一言を区切り、噛み締めるように告げる。

「……かしこまりました。お申し込みを、お受けします」

「賢明な選択だ。では、なにが欲しい？ 言ってみるといい。一切の遠慮は必要ない」

セラフィナは背を伸ばして真っ直ぐに彼を見据<sup>みす</sup>えた。

「それでは、自由をいただきたく存じます」

セレストブルーの瞳に輝く光に、公爵がはっとした顔になる。セラフィナは決して目を逸らさなかった。

「二年の勤めのすべてが終わりましたら、レノックス家の娘ではなく、ハワード家の妻でもなく、自由の身となる保証をください」

室内に沈黙が落ちる。それは一分にも満たなかったが、セラフィナには五分にも、十分にも感じられた。公爵が一言も発<sup>は</sup>さずに、自分を凝視<sup>めい</sup>していたからだ。

「……君はずいぶん変わったものを欲<sup>ほ</sup>しがる」

やっと出た一言がそれだった。

「では、君にとつての自由とはなんだ？」

公爵の挑むような問いかけに、セラフィナはやはり迷いなく答える。

「自分の意志で自分の生き方を決める権利です」

きっぱりとした声は意志の強さの表れでもあった。

口約束での契約がまとまったのち、公爵はセラフィナの希望どおりに、一旦は食堂へ送り届けてくれた。そして明朝にはブラッドフォードに出発するから、荷物をまとめ、別れを惜しんでこいと  
言われる。

馬車で町中<sup>まちなか</sup>に差ししかかった途端に、セラフィナは安堵から涙<sup>なみだ</sup>が滲<sup>にじ</sup>んだ。ほんの数時間離れていた